

Holo Audio R2R DACであるCyan 2、Spring 3、MAYの3機種、および 各グレード（L1, L2, KTE）の音質的な違いとポジショニング

Holo Audio の設計思想として、上位モデルになるほど「空間の3次元的な立体感」「圧倒的な静寂感（背景の黒さ）」「音の実在感・生々しさ」が劇的に向上していくのが特徴です。

1. 機種ごとの根本的な音質・設計の違い

まずは、各シリーズが持つ独自のサウンドキャラクターと設計の違いです。

【価格・性能レンジ】

Cyan 2 (エントリー/単一) ——> Spring 3 (ミドル/3 階級) ——> MAY (フラッグシップ/3 階級)

Cyan2



音の傾向： 快活でエネルギー感があり、スナップの効いた現代的なサウンド。

- 特徴： ボタンや画面、リモコンを一切排除した「純粋な DAC 回路」のみのコンパクト機です。上位機に比べるとやや音が前に出る（イン・ユア・フェイスな）傾向があり、ロックやポップスを聴くと非常に楽しく鳴ります。ただし、内蔵の PCM ラダー回路は上位機ほど物量投資されていないため、生データ（PCM）のままだとややドライに聴こえることがあります。外部 PC で DSD（または HQPlayer 等でのアップサンプリング）を入力した際に、真の圧倒的な高解像度を発揮する特性を持っています。
-

Spring3



-
- 音の傾向：濃密でアナログライク、中低域に厚みのある有機的なサウンド。
 - 一般的なデルタシグマ型 DAC（ESS や AKM のチップ搭載機）のようなカチッとした人工的な切れ味とは一線を画します。極めてアナログライクで自然、肉声や生楽器の質感がリアルに迫る有機的なサウンドが最大の魅力です。
 - 特徴：上位機「MAY」の技術を 1 シャーシに凝縮した実力派です。Cyan 2 と比較すると、一音一音の滑らかさと音場の「深さ（奥行き）」が明確に向上します。R2R らしい滑らかさと温かみ（ウォームさ）のバランスが最も良く、音楽を心地よく、かつハイレゾリューションに楽しめます。
 - 圧倒的な空間表現と立体感
音場が左右・前後・上下に非常に広く展開し、録音現場の空気感や楽器の配置をリアルに描き出します。
 - 歪みのない漆黒の背景
新開発のデグリッチ技術とジッター抑制（PLL+FIFO）テクノロジーにより、背景の静寂感（ノイズの無さ）が優れています。そのため、微小な音がスッと浮き上がります。
 - 滑らかで聴き疲れしない音
高域の刺さりやデジタル特有の硬さがなく、密度が高くしなやかな音です。特に NOS モードではその特性が顕著です。
-

MAY



- 音の傾向： 圧倒的な「実在感」、極限の透明度と、広大な 3D サウンドステージ。
- 特徴： 電源部を完全な別筐体とした 2BOX 構成の絶対的フラッグシップです。Spring 3 と比べても、背景のノイズフロアが完全に消え去り（漆黒の背景）、音が空間にフワッと浮かび上がる「3 次元的な立体感」が 15～20% 近く向上します。全帯域のスピード感と、楽器がそこにあるかのような「生々しいリアリズム」において、世界のハイエンド DAC と並ぶ極限のサウンドです。
- **主な音質傾向と特徴**
- **濃密で実体感のある「音像型」サウンド**
一般的なデルタシグマ ($\Delta\Sigma$) 方式 DAC に多い「クールで細身な分析的サウンド」とは対照的です。音の一粒一粒が太く筋肉質で、温度感が高く、ボーカルや楽器がすぐ目の前で鳴っているかのような強い実体感（生々しさ）を感じられます。
- **圧倒的な静寂性（漆黒の背景）**
徹底的に分離された外部電源筐体と贅沢な物量投入により、ノイズフロアが極限まで低く抑えられています。無音状態の「黒さ」が際立つため、微細な余韻やホールの空気感が浮き彫りになります。
- **深く沈み込む、強靱な低域表現**
低域はただ量感があるだけでなく、重心が非常に低くどっしりと引き締まっています。音楽の骨格を力強く支え、ベースやドラムの打撃音に圧倒的な実体感を与えます。
- **3D ホログラフィックな音場と定位**
左右完全独立（デュアルモノ）の回路設計により、チャンネルセパレーションが極めて優秀です。上下・左右・奥行きに対して立体的に音が配置され、オーケストラやライブ音源での音場展開には圧倒的なリアリズムがあります。
- ---
- **モード設定による音質の変化**
- MAY DAC は、フロントパネルの切り替えや外部処理によって大きくキャラクターを変えることができます。

モード設定	音質傾向のディテール
NOS モード (Non-Oversampling)	MAY の真骨頂。デジタル特有のトゲ（刺激音）が一切消え去り、最もアナログレコードに近い、滑らかで肉厚な質感を堪能できます。
OS モード (Oversampling)	輪郭がシャープになり、現代的なカッチリとした高解像度サウンドにシフトします。エッジの効いた現代ポップスや電子音、細部を分析的に聴きたい場合に向いています。
HQPlayer 等での外部アップサンプリング	パソコン等から高精度な DSD1024 や高レート PCM に変換して入力すると、NOS モードの肉厚さを保ったまま、高域の伸びや粒立ちがさらに緻密に進化します。
PLL（位相同期回路）の ON/OFF	- ON（デフォルト）：音像がクッキリ引き締まり、フォーカス感とダイナミックさが増します。 - OFF：中高域の張りが抜け、よりマイルドで広がりのある自然な音色に変化します。

•

2. 各モデルにおける「L1 / L2 / KTE」の音質変化

Spring 3 と MAY に用意されている 3 つのグレードの音の違いです。Holo Audio におけるパーツ選定のアップグレード効果は、両機種で共通の傾向を持っています。

Level 1（L1）：ベースモデル

- 音質：ストレートでニュートラル、極めて高精度な基準サウンド。
- 上位と比べるとパーツが標準的なため、わずかに硬質で線が細く感じられる場合がありますが、Holo 特有の歪みのなさ、NOS モードによるタイムドメインの正確さは 100% 味わえます。

Level 2（L2）：ミドルグレード

- 音質：しなやかさ、透明感、聴き疲れのないリラックス感の向上。
- HoloAudio カスタムの特注超高圧コンデンサー等が投入されます。電源のフィルタリング性能が大幅に強化されるため、L1 にあった微細な硬さが取れ、音場全体がふわっとオーガニックに広がります。ディテールの見通しが良くなり、クラシックやアコースティック音源での空気感がより美しくなります。

KTE（Kitsune Tuned Edition）：最上位フラッグシップ

- 音質：ダイナミックな躍動感、低域のエネルギー、強烈な実在感。
- ハンドメイドの O 型フラットワイヤー銅トランス、1.5mm の純銀配線、そして「厳選された最高測定値の R2R モジュール」が贅沢に投入されます。
- L2 の「静かで滑らか」な方向性に加え、音の輪郭の力強さ、低域のアタックの沈み込み、ボーカルの肉声感が一段と引き締まります。さらに、KTE 専用の「強化型 Titanis 2.0 USB モジュール」が投入されます。

ル」により、USB 接続時のデジタルジッターが徹底排除され、PC オーディオ特有のトゲっぽさが完全に消え去ります。

Spring3

上位フラッグシップ機「May DAC」の回路技術（トリクルダウン）を継承しており、基本的な DAC 回路基板のコア設計や再生スペック（PCM 1536kHz、DSD1024 対応）は全モデル共通です。しかし、搭載される電源トランス、コンデンサ、配線材、USB モジュールの品質によって各モデルの特徴と音質が差別化されています。

「Spring 3」シリーズ共通の音質傾向

一般的なデルタシグマ型 DAC（ESS や AKM のチップ搭載機）のようなカチツとした人工的な切れ味とは一線を画します。極めてアナログライクで自然、肉声や生楽器の質感がリアルに迫る有機的なサウンドが最大の魅力です。

- 圧倒的な空間表現と立体感
音場が左右・前後・上下に非常に広く展開し、録音現場の空気感や楽器の配置をリアルに描き出します。
- 歪みのない漆黒の背景
新開発のデグリッチ技術とジッター抑制（PLL+FIFO）テクノロジーにより、背景の静寂感（ノイズの無さ）が優れています。そのため、微小な音がスッと浮き上がります。
- 滑らかで聴き疲れしない音
高域の刺さりやデジタル特有の硬さがなく、密度が高くしなやかな音です。特に NOS モードではその特性が顕著です。

Spring3 各モデルの音質傾向・違い

モデル	内部の主なパーツ特徴	音質の傾向・キャラクター
L1	標準的なベースレベルのコンデンサー、Red label 5N 銅 O 型トランス。丸線タイプの銅配線。	ストレートで高コスバな R2R サウンド Spring 3 が持つ本来の歪みのなさ、高い解像度、正確な定位感をストレートに味わえる基盤となる音です。十分高性能

		ですが、上位と比べるとやや硬質に感じられる場合があります。
L2	HoloAudio 製カスタムコンデンサーを搭載（電源フィルタリングを強化）。トランスや配線は L1 と同様。	洗練された透明感とリラックス感 L1 のニュートラルさを維持しつつ、電源のノイズがさらに抑えられたことで、音がより「リラックスしてしなやか」になります。微細なディテールが鮮明になり、空気感や透明度が増すのが特徴です。
KTE	100VA O 型フラットワイヤー銅トランス、1.5mm 純銀配線、厳選された最高測定値の DAC モジュール、強化型 Titanis 2.0 USB モジュール、Red Nano ヒューズ。	圧倒的なエネルギー感、立体感、生々しさ L2 までの音に比べ「劇的な変化（Night and Day）」と評されます。純銀配線や大型トランスにより、低域の厚みとスピーード感、ボーカルの生々しさが大幅に向上。空間の広がり（3D サウンドステージ）や、実在感のあるダイナミックな鳴り方が最大の魅力です。

MAY

Holo Audio のフラッグシップである **MAY** は、「**DAC 本体**」と「**独立した専用電源ユニット**」の **2 筐体構造**を全モデルで採用しており、電源ノイズを物理的に遮断しているのが最大の構造的特徴です。2BOX 構成により、歪みのなさ、静寂感、立体的な空間表現において世界のトップクラスに位置する R2R DAC です。

□ **漆黒を乗り越えた「無」の背景（S/N 感）**

電源部が完全にセパレートされているため、Spring 3 以上に背景のノイズフロアが低いです。音が鳴っていない瞬間の「静寂の空気感」までリアルに描写します。

□ 圧倒的な低域の解像度と沈み込み

超低域のレンジが非常に深く、かつダンピングが効いています。オーケストラの地鳴りのような重低音や、ベースの弦の震えが濁らずに分離します。

□ 正確無比な 3 次元の音像定位

音場（ステージ）の広さだけでなく、その空間の中に楽器やボーカルが「そこに実在する」かのような実在感・立体感が極めて強固です。

MAY に用意されている **L1 (Level 1)**、**L2 (Level 2)**、そして最高峰の **KTE (Kitsune Tuned Edition)** の 3 つのモデルは、基本的な 2BOX 回路設計を共有しつつも、**デジタル入力モジュール**、**電源コンデンサ**、**トランスの内部構造**、**配線材のクオリティアップ**によって、以下のような音質の違いを持っています。

MAY における各モデルの音質傾向・違い

モデル	内部の主なパーツ特徴	音質の傾向・キャラクター
L1	標準的なベースレベルの Vishay コンデンサー。標準仕様の O 型トランス。 標準型の USB モジュール を搭載。 リモコンは付属しません。	極めて正確で、MAY の素性をそのまま出すストレートな音 2BOX 構成ならではの圧倒的な S/N 感や、NOS（ノン・オーバーサンプリング）モードによる正確なタイムドメインをしっかりと体験できます。上位に比べるとやや硬質で、線が細く感じられる場合がありますが、MAY の骨格となるサウンドそのものです。
L2	HoloAudio 製カスタムコンデンサー にアップグレード。USB モジュールがガルバニック絶縁された「 Titanis 2.0 強化型 USB モジュール 」へ進化。 リモコンが付属します。	滑らかさ、透明感、そしてしなやかな空気感の向上 電源部の強化により、L1 の持つ正確さに「しなやかさ」と「聴き疲れのなさ」が加わります。さらに Titanis 2.0 モジュールのおかげで、 USB 接続時の音質が L1 から明確にジャンプアップ し、PC 特有のデジタルトゲっぽさが消え、背景の静寂が一段と深まります。
KTE	手巻きの O 型フラットワイヤー銅トランス、1.5mm 純銀配線、厳選された最高測定値の R2R/1bit モジュール、KTE カスタムコンデンサー、CNC 削り出し赤銅シールド、Red Nano ヒューズ。もちろんリモコン	圧倒的なマクロダイナミクス、実物大の音像、生々しいリアリズム L2 の「静かで滑らか」な方向性に、「 音が前に迫ってくるような実在感とエネルギー感 」が加わります。純銀配

ン付属。	線と特製トランスの恩恵で、低域の沈み込みの深さとスピード感が強化され、ボーカルや楽器の輪郭が驚くほど立体的に浮き上がります。
------	--

MAY における音質選び・比較のポイント

1. USB 接続がメインなら「L2 以上」が必須条件

- L1 と L2 の最大の壁は「Titanis 2.0 強化型 USB モジュール」の有無です。PC やネットワークストリーマーから USB で直接 MAY に入力する場合、L1 と L2 では静寂感やジッターの少なさに明らかな差が出ます。

2. L2 と KTE の違いは「微細なニュアンス」か「ダイナミックな実在感」か

- 海外のオーディオコミュニティでもよく議論されますが、L2 と KTE の「解像度や基本的な音場の広さ」自体は、直接 A/B テストで比較してようやく認識できるレベルとも言われます。
- しかし、「マクロダイナミクス（音の押し出し、アタックの強さ）」や「実物大の生々しさ」においては KTE が明確に上回ります。最高測定値のパーツのみをハンドセレクトして組まれているため、オーケストラのトゥッティ（一斉奏）での爆発力や、ボーカルの肉声感の濃さを極限まで引き出したい場合は、KTE がその要求に応えてくれます。

3. 外部機器との組み合わせによる選択

- もしすでに、高性能な DDC ([Holo Audio RED](#) や iCAT XDD SU-2 など) を所有しており、MAY に対して「**I2S (HDMI 端子) 接続**」を行う環境が整っている場合、USB モジュールの差は関係なくなります。その場合は、純粋な内部パーツの音質差（コンデンサーや配線材）の比較となるため、コストパフォーマンスを重視して L2、あるいは予算を抑えて L1 を選ぶという戦略も可能です。